

「乳幼児外注保育は危ない」

民主党が進める「待機児童ゼロ作戦」の陥穽

●子供目線なき「待機児童ゼロ作戦」

「待機児童ゼロ作戦」という言葉をご存知だろうか。平成十三年七月六日に、仕事と子育ての両立支援策の一環として閣議決定されたもので、基本的目標として、「潜在を含めた待機児童を解消するため、待機児童の多い都市を中心に、平成十四年度中に五万人、さらに平成十六年度までに十万人、計十五万人の受け入れ児童数の増大を図る」としている。

この作戦の結果、平成十四年度から三年間で目標を上回る十五万六千人の受け入れ児童数の拡大が達成されたそう

用者数は毎年、右肩上がりです昇しているともいう。言い換えれば、ゼロ歳児を保育所に預けてまでも仕事に復帰する母親が増えてきているということである。

自民党政権からのチェンジを旗印に政権を獲得した民主党も、なぜかこの待機児童問題はあっさりを受け継いでいる。昨年の十一月四日の閣議後記者会見でも、長妻厚生大臣は「待機児童の問題というのが、大きな問題である」というコメントをしている。

確かに、働きたい母親にとって、出産後保育を任せられる受け皿があるということは、社会復帰が容易になってこれほど都合がいいことはない。しかし、この待機児童問題を考えるとき、そこにあるのは、なぜか母親のみの都合で、子供の目線での議論がなんら聞こえてこないと思うのは私だけだろうか。

ましてや、今後ゼロ歳児保育がますます増えていくことが予想される中、子供の利益を優先した乳幼児保育の是非に関する真剣な議論が早急になされるべきであろう。

エドワーズ博美 昭和29(1954)年、山口県生まれ。米メリーランド大学大学院臨床心理科修了。アメリカ心理学会会員。訳書に家族政策についてのシンクタンクであるアメリカ価値研究所が編纂した『独身者は損をしている——財産を築き、健康を維持し、子供の非行を防ぐ「家族」という仕組み』(明成社など。

だ。

しかし、平成二十年に五年ぶりに待機児童が増加に転じたことを受けて、待機児童の解消および保育施設の質、量の推進を目的として「新待機児童ゼロ作戦」が新たに制定された。福田内閣の時で、二十年二月二十八日付の福田内閣のメールマガジンには、「待機児童がゼロになるように、様々な保育サービスを拡充することで、今後三年間のうちに集中的に受け入れ児童数を増やすための施策を講じていく。そうすることで母親が仕事か家庭か二者択一しなくていい社会をつくりあげたい」と書いてあった。

更に、厚生労働省によると、現在の待機児童の八割がゼロ歳児から二歳児だという。そして、ゼロ歳児の保育所使

●「終日保育は有害」

一九七〇年代、女性の社会進出が急激に進みつつあるアメリカで、幼児教育に情熱を燃やして、半日保育園を開園したドレスキンという一組の夫婦がいた。

しかし、社会進出に意欲を燃やす母親たちの強い要望もあって、仕方なく終日保育も始めた。ところが、半日保育から終日保育に切り替わった途端、子供たちの行動があまりにも変化し、その変化に心を痛めて、夫婦は五年後には園を閉じてしまった。その後、一九八三年に、夫婦は自らの経験を基に、「The Day Care Decision」という一冊の本を出版した。その本の中で、夫婦は、「終日保育は決して親代わりにはならず、特に三歳以下の子供には有害である」「終日保育に子供を預けるということは、飛び方知らないひな鳥が親鳥に見放されて巣から追い出されたようなものだ。ひな鳥の翼は充分には発達しておらず、外の世界に飛び立つ準備はまだできていない」といつて終日保育に警鐘を鳴らしている。閉園を決心した理由については「地域の人たちにどんなに園の必要性を要求されても、終日保育が子供たちに有害だと分かった以上、園を続けることは私たちの良心に反し、道義的にも許されることではな

い」と記述している。

その後、終日保育、乳幼児保育の是非を巡って、アメリカでは様々な議論や研究がなされてきた。

日本政府として「待機児童」の問題に取り組むのであれば、せめてそうした研究に耳を傾けて、果たして母子にとつてどのような選択が賢明といえるのか、そうした指針を示すべきではなかるうか。

そうした議論なくして「待機児童」の数のみ減らすということは、あたかも母親たちに「ゼロ歳児からの外注保育はなんら問題ありませんよ」と言う誤ったメッセージを送っていることに他ならない。

●世界家族会議での警告

二〇〇九年八月十日から十二日の間、アムステルダムで全世界から六百名以上の人が出席して、世界家族会議が開催された。

その会議の中、ブッシュ政権下で厚生省副次官補として、米国立児童衛生局による外注育児と子供の発達に関する研究に深く関わってきたパトリック・フェイガン博士が「外注育児と子供の社会面・精神面での発達」と題する講演をされた。その講演の中で博士は、様々な研究結果を引用して、はつきりと外注保育の危険性を指摘されている。

つた子供に比べ、三歳児の時点で自分自身に自信があり、問題行動が少なく、社会性があり、言語能力に優れている(1)

・「十五カ月までに築かれた母子間の愛着関係が、その子の友人関係に顕著に現れる」

・「三歳までに愛着関係がしっかりと構築された子供は、そうでない子供に比べて、攻撃性を伴わない友情関係を築くことができる」(2)

こうした研究結果が物語っているように、三歳児までに構築された母子間の愛着関係がその後の子供の人生を大きく左右する。まさに「三つ子の魂百まで」だ。こんな大切な時期を本当に保育園任せにしているのだろうか。

●終日保育が親子の信頼関係を損なっている

前述したドレスキン氏も言及しているが、こうした愛着関係を構築するには、常に親がそばにいて子供の感情に配慮する必要がある。

愛着関係構築の要素を三つ挙げるとすれば、それはひとつには、同一人物によるものであるということ。二つ目は、この特定の育児者と子供の関係が数年間続くということ。そして最後は、心配りのある育児をするということだ。終日、保育園に預けて、夕方だけ接していたのでは、

博士の引用した研究や他の学者の意見を参考にして、「待機児童ゼロ作戦」と称して、育児を簡単に保育園に託すことへの危険性を喚起したい。

最初に、乳幼児期における母親との関係が母子間の愛着関係構築に大きく寄与し、この愛着関係がその後の子供の発達、さらには成長した後の対人関係にまでも影響するということについて考えたい。

「愛着構築と人間の成長」と題する専門雑誌がある。一九九九年以降、毎年六回発行され、その中で、イギリスやアメリカの著名な学者が、心理学者、精神科医、看護婦等々といった職業の人から要求される、愛着構築理論に関する研究や症例をまとめ発表している。下記にこの雑誌に掲載された研究から抜粋した、研究結果に基づく学者の意見を少し列記する。

・「細やかな心配りのある育児をすることで、子供は母親、自分自身、そして社会に対する信用を育む」
・「心配りのある育児なくしては、愛着関係の構築はできず、子供は対人関係において不自信を抱き、社会的に問題行動を起こす確率が高くなる」
・「親子間での愛着関係が構築できることで、子供たちはその後の人生で他人との関係を構築する能力を養い、自らの感情の抑制ができ、内面の葛藤に対処できる」
・「十五カ月までに愛着関係が構築できた子供はできな

子供、特に乳幼児は誰が親で、誰と信頼関係を築いたらいいのか混乱してしまう。そして、せっかくなら築かれた信頼関係も、出産後一、二年で保育園に預けられると、しっかりとした愛着関係構築には至らない。

更には、昼間仕事をして疲れた母親に心配りのある育児を期待するのは無理があるというものだ。福田内閣は「母親が二者択一しなくていい社会」と言っているが、「二兎を追うものは一兎をも得ず」と言うことわざもある。外注保育に頼っているのは、愛着構築に必要な三つの要素を満たすことは望めないだろう。

更に、子供の健康と成長を調査した米国立研究所の追跡調査でも興味深い結果が出ている。子供が三歳児までの外注保育の量が子供の成長のみならず、母親が子供の要求を察する感受性能力にまでも影響を与える、と言う。

「三歳になるまでに、子供が必要としている要求に応えるといった、母親の子供に対する感受性能力が減少すると、せっかくなら築いた愛着関係も壊れる恐れがある」と言う研究結果もある(2)。

外注保育をすることで、子供は母親との愛着関係が築けないばかりか、母親も子供が必要としている要求に応える感受性能力を減少させ、それがますます愛着関係構築の障害となる。まさに、悪の連鎖が始まるのだ。

細かい心配りで育児をしないと、子供は成長を妨げられ

る。これを的確に表現した学者がいる。知能指数のことをIQと言うが、このIQよりもっと生きていくうえで大切なものがあると言って、感情知能なる言葉を生み出した心理学者がいる。ハーバード大学でも教鞭をとっていたゴールマン博士で、博士は「EQ（感情知能）」と題する著書の中で、乳幼児に対する感情反応の大切さをこう説明している。

「新生児は生後まもなくから、相手を思いやる能力を持ち合わせている。だから、一人の赤ん坊が泣き出すと、それに同情して他の赤ん坊も一緒に泣き出すのだ。しかし、こうした生まれながらに備え持った感情移入能力も、成長の過程で自分の感情表現に対して反応がないと、感情表現しなくなり、最終的には感情さえ無くしてしまう。」

すなわち、乳幼児が泣いている時には、そばに行つて一緒に悲しんであげ、笑っている時には一緒に笑つてあげる。これを繰り返すことで、子供は自分自身の感情に意味があることを自覚し、感性が豊かになる、と言う訳だ。

我が子一人の感情を受け止めてあげるのも大変なのに、一人で五人も六人も世話をする保育園の保母さんにこうした感情反応を期待するのは無理というものだ。感情反応がないと、子供は無感情、無感性になってしまう。「相手のことを思いやる子供が少なくなった」と言われて久しい

が、なるほど、と頷ける。

子育ては、なにもおむつを換えたりミルクをやったりと言った、生理的なことを処置すればいいだけではない。子育ては子供の心を育てることだ。母親が常にそばにいて、子供の心に応えてあげないで、どうして心を育てることができるといふのだろうか。心を育て、価値観を教え、道徳心を培う、これが真の親の務めだ。仕事の片手間にできることではない。ドレスキン氏も言っている。「肉体的欲求を満たせば子供は生きてはいける。しかし、精神的欲求を満たしてあげないと、子供は成長して人生の困難に打ち勝つことはできない」

●外注保育が子供の問題行動を引き起こす？

前述した、愛着関係からみた子供の成長もさることながら、他にも多くの研究が、外注保育と子供への影響を指摘している。そのいくつかを下記に列記する。

最初に、母親の職場復帰と子供の適応性の関係を指摘している研究を紹介する。職場復帰をする母親の子供は殆ど保育園に預けられることを考慮すると、職場復帰すなわち外注保育と考えていいだろう。

うでない子供に比べて、四歳、五歳、六歳になった時の適応能力に欠ける」

・「我が子が乳幼児の時から常動として働く母親は、貧困や母親の教育程度といった一般的に負の要素となりうる条件より以上に、子供の適応性に影響を与える」(3)

・「乳幼児の時から母親が働いている子供は、癩癩を起しやすく、欲求不満に対する対処が下手で、他の子供から暴力的で意地悪だと言われることが多い」(4)

次に、せっかく構築された愛着関係もその後の外注保育で失われることを指摘をした研究を紹介する。

・「構築された愛着関係に支障が見られる子供の多くは、十五カ月から三十五カ月の間に週に十時間以上の外注保育を経験している」(5)

・「一歳児の時、愛着関係の構築が見られた子供も、その

後保育園に預けられ、繰り返し(母親と)離されることにより、幼稚園児までに愛着関係を失うことがある」(6)

最後に、外注保育と問題行動に関する研究を紹介する。・「生後三カ月から六カ月のうちに、母親以外の人による育児を経験する時間が長いほど、物を壊したり、喧嘩したり、殴ったり、非協力的であったりと言う、問題行動が多くなる」

・「子供の社会的、精神的適応性を予測する一番の鍵は、生後どのくらい早くに、一日にどのくらい長い時間、どのくらいの期間を継続的に保育園に預けられたかを知ることだ」(7)

・「幼稚園児の問題行動は十五時間以上保育園に預けられた子供に多く、三十時間だと問題行動も二倍になる」

・「問題行動は二歳までに保育園に預けられた子供に多



昭和天皇と
激動の時代

臨時増刊としてご好評をいただいた
一冊を送料サービスでお送りします

「遙かなる昭和」と
併せてこの機会に!

書店ではお求めになれません。
直接本誌販売部へお申込みを

【ハガキ】〒100-8077
産経新聞社雑誌「正論」臨増保
【FAX】03-3241-4281
【メール】seiron@sankei.co.jp

く、一歳までに預けられた子供は問題行動も極端に多い」(8)

・「外注保育を多く経験した子供の問題行動は、小学校六年生になっても収まるどころか増えてくる」(9)

以上のように、様々な研究結果が外注保育と子供の問題行動やその他の悪影響との関連性を指摘している。

しかし、一言追加するならば、研究結果は因果関係を示すものではない、ということだ。ゼロ歳児から保育園に預けられた子供はみんな問題行動がある、と言うのではなく、これらの研究はあくまで外注保育が子供の成長にとって危険因子になりうる、ということを指摘しているのだ。

乳幼児を抱えて、仕事をしなくても、家庭の事情でやむにやまれず子供を保育園に預けておられるお母さんもいらっしやるだろうし、その人にしかできない大切な仕事をするために外注保育に頼っておられるお母さん方もいらっしやるだろう。私は何も、そうした個々の事情も考慮せず、全ての母親は仕事をしないで子育てに専念すべきだ、と言うつもりは毛頭ない。

ただ、問題なのは、闇雲に「待機児童ゼロ作戦」なるものに政府が力を入れ、母親を労働力としかみなさないこと、そして、前述した種々の危険因子があることも知らされず、安易に乳幼児保育に頼ってしまうことによる子供への

の悪影響の恐ろしさだ。

「二者択一」を迫られた時、安易に保育園に頼るのではなく、長い目でみて、我が子にとって何が一番大切か、目の前の仕事やお金では代えられない宝があることを知って欲しい。

民主党は子ども手当の支給をマニフェストに挙げて政権を獲得したが、子供にとって大切なのは保育所でもなければお金でもない。子供、特に乳幼児にとって大切なのは、いつもそばにいてたくさん愛情を注いでくれる母親の存在だ。

母親との愛着関係が構築され、親との信頼関係が築かれた子供は道徳観もしっかりしている。それは、ひとつには、親を信頼する子供たちは親の愛情を失いたくない一心で親の期待に応えようとするからだ、と指摘する心理学者もいる。

本当に子供のことを思い、日本の将来を思うのであれば、せめて子供が乳幼児の間は母親が働かなくても安心して子育てできる、そんな社会を実現することだ。そうした子育ての基本も分からずに、子ども手当捻出のために短時間の議論で、有無も言わず次から次に大切な予算さえも削っている事業仕分けを目にして、滑稽さを通り越して空恐ろしささえ感じたのは私だけだろうか。

【参考文献】

- (一) Belsky, J. & Fearon, R.M. "Early attachment security, subsequent maternal sensitivity, and later child development: Does continuity in development depend upon continuity of caregiving?" *Attachment & Human Development*, Vol. 4 Number 3(2002); p361-387.
- (二) McElwain, Nancy L. Cox, Martha J. Burchinal, Margaret R., & Macfie, Jenny. "Differentiating among insecure mother-infant attachment classifications: A focus on child-friend interaction and exploration during solitary play at 36 months." *Attachment and Human Development*, Vol. 5 Number 2 (2003); p136-164
- (三) Belsky, J & Eggebeen, D., "Early and extensive maternal employment and young children's socioemotional development: Children of the National Longitudinal Survey of Youth." *Journal of Marriage and Family*, Vol. 53 No. 4 (1991); p1083-1098.
- (四) Youngblade, L.M., "Peer and teacher ratings of third-and fourth-grade children's social behavior as a function of early maternal employment." *Journal of*

Child Psychology and Psychiatry, 44 (4) (2003); p477-488.

(五) NICHD Early Child Care Research Network (2001B), "Child-care and family predictors of preschool attachment and stability from infancy." *Developmental Psychology*, 37(6); p847-862.

(六) Egeland, B. & Hester, M., "The long-term consequences of infant day-care and mother-infant attachment." *Child Development*, 66 (1995); p474-485.

(七) NICHD Early Child Care Research Network (2003). "Does amount of time spent in child care predict socioemotional adjustment during the transition to kindergarten?" *Child Development*, 74(4); p976-1005

(八) Loeber, S. et al. "How much is too much? The influence of preschool centers on children's social and cognitive development." *Economics of Education Review*, b Vol 26 (2007); p52-66.

(九) Belsky, J. et al. "Are there long-term effects of early child care?" *Child Development*, Vol 78, No.2 (2007); p681-701.